「日本の品質改善枠組みを活用し、地場産業を盛り上げていく」

エルサルバドル在外事務所
マリア・ベニータ・アルバラード・デ・リベーラさん

マリアさん（写真右）

マリア・ベニータ・アルバラード・デ・リベーラさんは、民間企業での勤務経験を経て、1997 年に、JICA 青年海外協力隊エルサルバドル在外事務所に入構されました。青年海外協力隊の派遣のみ行っていたエルサルバドル事務所が他の協力を行うようになった 1998 年以降は、JICA エルサルバドルのナショナルスタッフとして、エルサルバドルの発展のために活躍されています。インタビューを通して、マリアさんが JICA に入るまでの経緯、仕事に対する想いを伺うことができました。特に、エルサルバドルの地場産業を盛り上げるべく奔走するマリアさんのお話からは、彼女のエルサルバドルへの愛を感じたほか、多種多様な国際協力の形を考えるきっかけとなりました。

●どのような業務を担当していますか？

2016 年から 2019 年まで、「エルサルバドルにおける事業経営、品質、生産性の向上に焦点を当てた MSE 支援スタッフの能力向上プロジェクト」を担当し、コスタリカ国立大学と協力して、CONAMYPE（エルサルバドル国家小零細企業委員会）を支援し、国家レベルで専門家を育成しました。

新型コロナウイルスが流行した後も、これらの品質・生産性向上プロジェクトに関わった専門家らを知識面からさらに強化するプロジェクトを開始しました。まず、異なる専門分野をもつ 3 人の JICA 専門家によるチームを編成し CONAMYPE に派遣することで、新たな協力関係をスタートしました。これは、CONAMYPE の専門家へ研修を行った後、小零細企業に訪問してもらうことで、

「カイゼン（高度成長期の日本で、ものづくりの品質や生産性を高めるために製造業の現場で培われた取り組み「整理・整頓・清掃・清潔・しつけ」（5S）などが基本）」や「QC サークル（同じ職場内で品質管理に関する啓発を自発的に小グループで行う活動）」に関する枠組みを普及する取り組みです。

彼ら専門家の知見が強化されれば、その分だけ彼らの仕事もより良いものとなることから、とても大事なプロジェクトであると言えます。

これらに加えて、保健に関するプロジェクトも担当をしてきました。例えば、現場で従事する看護師を対象とした看護基礎・継続教育を強化するプロジェクトを過去に実施しました。それはエルサルバドルの他に、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、ドミニカ共和国でも行われ、中米地域全体が対象となりました。このプロジェクトは「プロジェクト・アンヘル」（スペイン語で「天使のプロジェクト」の意）」と呼ばれ、看護師の助産分野の継続教育の質の向上に焦点を当てたものです。プロジェクト概要 | 中米カリブ地域/看護基礎・継続教育強化プロジェクト | 技術協力プロジェクト | 事業・プロジェクト - JICA

また、シャーガス病対策を通して、地方の健康増進のために従事したほか、元研修員に対する JICA フォローアップ協力では子宮頸がんをテーマにした支援も行いました。

●JICA に入構したきっかけを教えてください

私は大学で経営組織論について勉強しておりましたが、同時に日本文化や日本の発展に深く関心を持っていました。私の出身地であるエルサルバドルには、過去から現在にわたって貧困をはじめとしたさまざまな問題がありますが、特に戦後飛躍的な発展を遂げた日本という国から何かを学ぶことができるのではないかと考えていたのです。なかでも、日本企業の人事戦略については大変興味を持っていました。そうした折に、在エルサルバドル日本大使館で働いていた友人から JICA 青年海外協力隊エルサルバドル事務所で働く機会があることを知り、JICA 職員として国際協力の世界に飛び込むことを決意したのです。

入構一年目当時

実際に働いてみると、仕事仲間や JICA が技術協力を行っている組織のカウンターパートの方々との間に、友情と協働関係が生まれるこの仕事がすぐに好きになりました。ナショナルスタッフの業務は、プロジェクトの立案から、進捗確認、そして結果の評価までを一貫して行います。こうした働き方によって、私の国の社会・経済の発展を支えているのだと実感でき、私が JICA で仕事をする上でのやりがいとなっています。もちろん、仕事をする上で「挑戦」は多くありますが、自国に貢献したいという思いが、目の前に立ちはだかるどんな困難さえも前向きに取り組もうとする原動力になっています。

そして、JICA は私たちナショナルスタッフの意見や提案に耳を傾け、裁量大きく仕事を任せてくれることから、非常にありがたく思っています。

●JICA を通して見えた日本の美徳とは

JICA の仕事を通して、かねてから興味のあった日本の発展について、その秘訣がなぜかということも分かってきました。それは、日本人が困難な課題に対して粘り強く取り組むからです。日本人はとても丁寧で、熱意を持って仕事をしています。たとえ何か失敗があったとしても、失敗に向き合い、教訓を得て、よりよいものへと発展させていきます。加えて、日本の文化、仕事における規律、経験を貯蓄しておく習慣などは、JICA で働く中でも目にする場面が多いです。例えば、エルサルバドルで行われている生活改善のプロジェクトは、第二次世界大戦後に物資が不足していた日本が行っていた施策を応用したものになっています。これまで日本は何度も難しい局面に遭遇していますが、その度に柔軟に適応しながら発展を遂げてきました。こうした姿勢がエルサルバドルにも伝わっており、わが国も発展し続いていると感じています。

そして、この日本的な前向きな姿勢というのは、JICA の研修員からも同様に感じ取ることがあります。彼らは、コース毎に異なる日本国内の JICA センターで研修を受講し、同時にコミュニティでの活動を通して日本の人々とかかわります。研修を終えてエルサルバドルに帰ってくる彼らの考え方は、日本での学びに大きく影響されるのです。

元 JICA 研修生の方々との一枚

●エルサルバドルの小零細企業へのアプローチについて

私が担当するプロジェクトを通じて、JICA の技術協力を受けている CONAMYPE が支援するエルサルバドルの零細・小企業は、農産業、繊維・衣料、履物、食品、サービスなどさまざまな分野をカバーしていますが、新型コロナウイルスにより、どの企業も資金不足に直面している困難な状況です。しかし、CONAMYPE は品質・効率性向上に関わる技術協力を続けており、近い将来には小零細企業も品質・効率性を向上できるようになることでしょう。

地場の産業について実地調査するマリアさん

現状のエルサルバドルの小零細企業は、インフォーマルな形で運営されている傾向にあります。例えば、靴工房があったとして、その製法は家族や友人から伝えられ、仕事をする中で試行錯誤を繰り返しながら靴作りを徐々に熟練していきます。しかし、エルサルバドルにはこの分野の研修を行う教育機関がなく、また生産マニュアルもないため、技術の伝承が途絶えている可能性があります。そうした点において、製法を記録し、誰でも同じ品質のものを誰でも生み出せるようにするカイゼンの枠組みは非常に有用です。

カイゼンの枠組みは、日本の産業を大きく発展させた一方で、エルサルバドルでは未だに一般的ではない概念です。しかしながら、我が国の専門家たちがこの枠組みを世に広めてくれており、小零細企業にも少しずつであっても受け入れてもらえるようになると期待しています。

●今後の目標について

今の私の夢はこの国の小零細企業の成長を見届けることです。現在私は地方における組織能力開発に携わっており、いくつかの地方自治体では、JICA が実施する課題別研修に職員を参加させることで人材の能力強化に取り組んでいます。

具体的には、西部サンタアナ県カンデラリア・デ・ラ・フロンテーラ市において、靴生産者とともに「一村一品運動」に関連した小規模なプロジェクトを実施しており、同市のブランドや地域ブランドの構築を通じて、ビジネスマネジメン

トやプロモーション戦略に関する研修を実施しています。「一村一品」は以前から実施されている活動ですが、地場産業の活性化を通じて地域のアイデンティティを強化するという観点から、現在ではこれが優先的なテーマとなっている自治体もあります。

「一村一品」の活動は、人々のマネジメント能力の開発にとどまらず、文化や伝統工芸の保護と普及、お祭りなどを通した地元の食の促進など、多岐にわたっています。例えば、オレンジが「宝」だと言われているサン・ファン・オピコ市では、一村一品運動により活性化された「オレンジ祭り」が長年実施されてきたことで、多くの人々にこの地域を知ってもらうきっかけとなったこと、且つ住民の愛着と誇りを育くむことに繋がりました。地域を象徴する産業を振興することで、アイデンティティが生まれ、育まれることは素晴らしいことです。こうした小さな地場産業を発展させ、地元に誇りをもってもらうことは、私たちが将来的に実現したい目標です。

オレンジ祭りにて現地の住民の方との一枚

聞き手：
藤井 裕真
JICA 中南米部中米・カリブ課インターン
活動期間：2022 年 11 月～2022 年 12 月